

CUTTING EDGE

カッティングエッジ

77期中間事業のご報告

平成27年4月1日～平成27年9月30日



社長メッセージ



スマートフォン市場の世界的な拡大を背景に、高度化する顧客ニーズに素早く対応したことで売上高・利益ともに過去最高を更新しました。

事業環境・業績

2015年度上期は、スマートフォンの高機能化に伴い半導体・電子部品の需要が拡大したことから、日本や欧米地域のメーカを中心に積極的な設備投資が見られました。主に高周波デバイスやメモリなどでウェーハ薄化への加工ニーズが拡がりを見せ、グラインダの出荷が大幅に増加しました。また、消耗品である精密加工ツールの売上は、円安効果にも支えられて非常に高い水準で推移しました。

損益については、幅広い分野で様々なお客様と新しいアプリケーションの開発を進める中で研究開発費が増加しましたが、付加価値の高い製品の販売が好調だったため、収益性は改善しました。結果、上期業績は前年度に続き売

上高・利益ともに過去最高を更新しました。中間配当金につきましては前年同期から13円増配となる1株当たり85円とさせていただきます。

今後の見通し

いわゆるクリスマス商戦をターゲットとしたメーカ各社の設備投資は上期で一服し、下期にかけては不透明な点もあるため、通期売上高は減収を予想しています。しかし、足元ではスマートフォンの通信高速化に対応する電子デバイス加工ニーズの高まりや半導体パッケージング技術の進化により、「高度なKiru・Kezuru・Migaku技術」の需要が拡大しています。

変化のスピードが速い顧客要求に対して、

社員一人ひとりが自立的に判断し、素早く動ける組織づくりに注力すると共に、継続的なコスト削減と積極的な研究開発活動を両立する強い会社づくりへと今後も取り組んでまいります。

なお、株主還元については、今年度末に剰余金が発生する見込みであるため追加配当[※]を予定しております。

株主の皆様におかれましては今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

[※]追加配当について

期末時点で赤字の場合を除き、配当及び法人税支払い後の現預金残高が予定必要資金額を超過した場合は、業績連動分に加え、超過金額の3分の1を目処に配当に上乘せいたします。

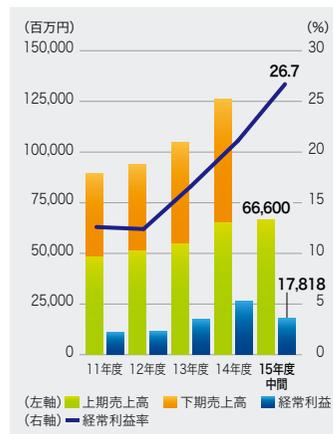
2015年12月

代表取締役社長 関家一馬



財務ハイライト

売上高・経常利益・経常利益率



親会社株主に帰属する当期純利益・1株当たり当期純利益



総資産・自己資本比率



キャッシュ・フロー



当期の概況

当期(2015年4月1日から2015年9月30日まで)においては、日本や欧米地域を中心に半導体・電子部品メーカー各社は設備投資を積極的に実施しました。そのような中、当社では精密切断装置の需要がロジックIC向けやLED関連向けに減少した一方で、電子部品やメモリ向けに増加したほか、精密研削装置の需要も電子部品・メモリ向けに拡大しました。このため、精密加工装置の売上高は前年同期と比べて減少したものの非常に高い水準となりました。また、消耗品である精密加工ツールは、顧客の高い設備稼働率と為替の影響もあり、数量・売上高共に堅調に推移しました。これらの結果、上半期の連結売上高は3年連続で過去最高を更新しました。損益面では、積極的な研究開発により販売管理費が増加しましたが、為替の影響や高付加価値製品の販売が好調だったことによりGP率が改善し、上半期の営業利益は2年連続で最高益を更新しました。

以上の結果、当期の業績は売上高666億円(前年同期比2.1%増)、営業利益177億48百万円(同29.3%増)、経常利益178億18百万円(同29.8%増)、親会社株主に帰属する四半期純利益120億56百万円(同23.6%増)となりました。

■財政状態

当期末の総資産は、前期末と比べ24億84百万円増加し、2,044億59百万円となりました。これは、主に現金預金や売上債権が増加したためです。負債は、前期末と比べ67億27百万円減少して、433億28百万円となりました。これは、主に仕入債務が減少したためです。純資産

は、前期末と比べ92億12百万円増加し、1,611億31百万円となり、自己資本比率は前期末比3.6ポイント増となる78.4%となりました。

■キャッシュ・フロー

営業活動では101億56百万円の資金増加、投資活動では34億58百万円の資金減少だったことからフリー・キャッシュ・フローは66億98百万円の資金増加となりました。これは、投資活動において有形固定資産の取得による資金支出があったものの、営業活動においては前年同期と比べ税金等調整前四半期純利益が増加したためです。財務活動では、主に配当金の支払によって35億40百万円の資金減少となりました。

これらの結果、当期末の資金残高は453億96百万円となりました。

通期の連結業績予想

スマートフォンなどモバイル機器関連需要は旺盛で、受注水準は依然として高水準ではあるものの、顧客からの引き合いが減少傾向にあることから、通期の売上高・利益は、前年と比べ減収減益を見込んでおります。

期末配当については1株当たり133円(業績連動分46円+追加配当分87円)を見込んでおります。

※実際の期末配当は、今後の業績変動や予定必要資金の精査によって大きく異なる可能性があります

2016年3月期

(金額の単位：百万円)

売上高	営業利益	経常利益	親会社株主に帰属する当期純利益	1株当たり当期純利益
118,800	26,100	26,300	18,500	517.52円



ディスコの企業理念



「高度な**Kiru・Kezuru・Migaku**技術によって
遠い科学を身近な快適につなぐ」

3つのコア技術を深めることで、ディスコは産業と暮らしに貢献していきます。

「高度なKiru・Kezuru・Migaku技術」とは

ディスコのビジネステーマを指しています。人類に欠かせない普遍的な技術である「切る」「削る」「磨く」という事業領域において、ディスコは世界のオンリーワン企業でありたいと考えています。あえてローマ字で表記しているのは、これらの分野でディスコの技術が世界標準となり、日本語でそのまま通用するようなレベルを目指すという、強い思いが込められているからです。

「遠い科学を身近な快適につなぐ」とは

ディスコの社会的使命(ミッション)を意味しています。日々進歩していく科学技術を、ディスコの「高度なKiru・Kezuru・Migaku技術」によって、人々の暮らしの豊かさや快適さに帰結させていきたい、という考えを表現しています。

ディスコが追い求める成長とは

企業の成長をどのように定義するかによって、経営の方向性は大きく変わります。ディスコの「成長」とは売上やシェア、規模の拡大などに依らず、2つの基準によって評価されています。ひとつはミッションの実現度が高まり、社会により大きく貢献ができているか、もうひとつはお客様・従業員・サプライヤ・株主など、すべてのステークホルダとの価値交換性が向上しているか、です。